『新青森市史　資料編5　近世（3）』

西野　隆次

『新青森市史』資料編近世は、三巻によって構成されている。すでに刊行されている近世（1）［二〇〇二年］では、青森湊と九浦制度、全国的海運、油川湊、松前・蝦夷地との関連性を示す資料などが収録され、近世（2）［二〇〇四年］では青森町の構造・支配、町人の経済活動や生活、松前稼にかかわる資料が収録されている。以上二巻の資料編は、近世弘前藩領において外浜の最大の港湾であった青森湊について、商業・流通というテーマで編纂されている。

二〇〇六年に刊行された本巻近世（3）は、「村」（農山漁村）・「生業」というテーマを大きな柱として資料を収録している。青森市の市域は、東・西・南を丘陵と台地に囲繞された三角形状の青森平野に展開し、北は陸奥湾に面している。そのため、近世青森湊は、農業、漁業、林業、畜産業という様々な産業部門も含めて総体的に把握しなければならず、本巻の「村」「生業」というテーマは必要不可欠なものである。

第一章　開発・農業生産
　1　年貢と負担　2　検見と検地　3　備穀と夫喰
　4　諸上納と生産環境　5　開発と復興　6　帰田法
第二章　山野と動物
　1　山林の利用　2　牧　3　動物と資源
第三章　漁村と漁民の生活
　1　漁師頭の変遷と漁師支配の実態　2　漁況と漁民の生活・内水面漁業　3　献上品としての魚介類　4　漁民の救済
第四章　野内町
　1　野内関所　2　野内町
第五章　浅虫村　―温泉と村落―
　1　浅虫温泉　2　木村庄左衛門家関係資料　3　浅虫村と災害　4　浅虫村諸御用留帳類
第六章　近世青森の宗教と社会
　1　青森町の寺社と信仰　2　浅虫夢宅庵と油川村熊野十二所権現　3　維新期の寺社と神仏分離
第七章　文久の川添田畑絵図
　1　川添田畑絵図関係文献資料　2　油川組　3　後潟組
［付図］「後潟・四戸橋両村川添田畑調」・「浦町組・横内組絵図」

第一章では、弘前藩の近世的土地所有体系を確立させた貞享期の総検地帳「陸奥国津軽郡御検地水帳」九四カ村分を巻末に一覧表化しており、弘前藩研究の基礎資料となりうる。この貞享の総検地に先立つ天和・貞享期に、藩では領内の各村の詳細を報告させた。これは「天和の書上」といわれ、農村構造の基礎的な情報を提供している。そのほか上層農の持高反別帳、検見役人の執務日誌、飢饉対策用の備穀に関する資料や、窮乏化した士族層に土地を配分して救済し、在方に移住させようとした明治三年の「帰田法」に関する資料も収録している。

第二章では、山林について山林統制令と藩の山林調査帳簿、青森町周辺の山林からの材木伐採資料を、藩営牧については市内域に設置されて

いた津軽坂牧・滝野沢牧・入内牧・雲谷牧の四牧に関して、牧の支配・管理に関わる資料や牧頭の系譜・由緒書を、そのほか人を喰い殺す狼・熊の対策資料、鳥類、鉄吹・製炭・漆栽培に関する資料も収録している。

第三章では、漁師頭の権限や漁民支配に関する資料のほか、鰯・鯖・鱈・鯡などの漁獲高や海難事故、河川での鮭漁と役銀徴収、幕府や藩へ献上する鮭・鱈その他の献上品の記事が収録されている。

第四節では、隣接する盛岡藩や黒石藩への対応のために設置されていた野内関所の機能にかかわる資料、在郷町である「野内町」に対する町奉行からの公定米価の布達、お救い籾・味噌の貸与、松前藩主の参勤交代にかかわる資料を収録している。慶応二年から同四年までの「野内村領大浦浜塩焚出手控」は、青森町の三国屋による製塩業の実態がわかる貴重な資料である。

第五章では、全国的にも有名な温泉場であり、弘前藩主の湯治場でもあった浅虫温泉について、温泉施設の補修経費や安永八年の浅虫村大火と被災者の救済に関わる資料、また浅虫村の庄屋を務め藩主の宿泊する本陣も経営していた木村庄左衛門家所蔵資料を一括翻刻している。慶応二年の「横内組浅虫村極難之者共人別書上帳」は、村内最下層民の家族構成・生業・田畑面積・疾病・松前稼が記載されており興味深い。

第六章では、青森市域の寺社の神主・別当・由来・建立年代・知行高などを記載した「寺社領分限帳」、浅虫村の曹洞宗寺院夢宅庵の由緒関係資料、外浜地域の社家小頭を務めた油川村の熊野十二所権現（油川熊野宮）神主家の沢田家所蔵の資料を収録している。

第七章では、「文久の川添田畑絵図」を収録している。幕末期の弘前藩領では「松前稼」が激増し、労働者不足により廃田が復旧できなくなっていたため、領内全体の個人把握と人の移動を家単位で掌握するために「面改」を実施した。同絵図はその関連資料で、油川組・後潟組に属する村々の絵図の原本をトレースしたものである。

以上、各章の収録資料について簡略に紹介したが、以下、本資料編の編纂体制あるいは内容などについて、いくつか私見を述べてみたい。まず、本資料編には、弘前藩の政治史や幕藩関係の資料がほとんど収録されていないことが第一の特徴である。すでに『青森県史』資料編津軽1前期津軽領（二〇〇二年）・同津軽2後期津軽領（二〇〇六年）が刊行されているが、両書とも藩政史や幕藩関係史を柱として編纂している。県史編纂の委員の諸氏が、同時並行で青森市史編纂にも関係されていることから、『新青森市史』では極力政治史関係の資料は割愛し、近世青森湊の特徴を引き出しやすい資料を、特に商業・流通・町支配・産業というテーマで収録したものと考えられる。同じ資料を重複して収録するよりは、『青森県史』では藩政資料を、『新青森市史』では個別地域史の資料を収録したほうが、豊富で多彩な資料を収録でき、またそれぞれの特徴を出しやすいため、参考になる編纂方法である。筆写も現在『青森県史』八戸藩編と『八戸市史』近世編の編纂にかかわっているが、県史と市史の編纂意義の区別や差別をしっかり行い、そこから収録する資料の選別・配分を行うべきであることを痛感させられた。

また近年、『弘前市史』通史編2（近世1）［二〇〇二年］・同通史編3（近世2）［二〇〇三年］も刊行されているが、この通史編ではこれまで秀吉政権期の津軽氏研究や弘前藩政史研究、また『青森県史』津軽

領の編纂に関係してきた研究者が詳細に執筆を行っており、弘前藩の研究史が凝縮されている。そして、全く同時期に刊行された長谷川成一著『弘前藩』（吉川弘文館、二〇〇四年）は、弘前藩の政治史を近世初期から幕末・維新期まで見通して分かり易く執筆しており、現在の弘前藩研究の到達度を示している。弘前藩研究に関係する県史・市史編纂体制は、現在東北地方においても相当高い質を確立していると言えよう。

次ぎに収録資料について。第一章解説で「市域の農漁村部の発展と展開を明らかにする資料を収載」したとされ、確かに開発資料や「天和の書上」・貞享検地帳などの基礎資料を収録しているが、それらはすべて支配関係の資料であり、いわば農政資料である。農家の農業経営や漁師の具体的な漁法などに関する在方の資料が収録されていないため、村落史・漁村史の資料としてはやや具体性に欠けたのではなかろうか。ただし第五章解説に「そもそも津軽領では、このような地方資料が少ない」とあることから、在方資料の収集が困難であったことが予想される。弘前藩庁日記の「国日記」から多くの資料を採録している現状からも、編纂過程における苦労がしのばれる。旧八戸藩領でも、市史編纂過程で農村・漁村を頻繁に踏査したが、農村・漁村資料はほぼ皆無であった。地主や網元が組織的な大経営としては成長せず、管理された経営方法や収量の変遷を文書として残す段階まで到達していなかったことが原因と思われ、弘前藩領でも共通した背景があったのではなかろうか。

幸い本巻には「文久の川添田畑絵図」が収められている。この絵図の特筆すべき点は、陸奥湾に注ぐいくつかの小河川から用水路が引かれて水田が灌漑されていたことがわかるほか、村を通過する主要往還や農地へ行くための作場道・橋、自給肥料である草や飼料用の秣を採取する草山・秣場、薪を採取する柴山やそこへ行くための山道、沼、鮭を捕獲する留、海岸部、寺社などが詳細に描かれていることである。この絵図は、農家や漁民の生産・生活が、如実に村落景観として表されることを知りうる貴重な村落史資料である。村落景観論の重要性が提唱されて久しいが（木村礎著『日本村落史』弘文堂、一九七八年など）、在方資料の少ない弘前藩領において、少しでも村落史を明らかにできる資料をと考え、一章を割いて絵図を収載した本巻の識見は優れたものであると考える。

本資料編は、青森町を含む外浜で生活を営んでいた近世の農民や漁民の社会と支配について、豊富な資料を提供する一巻であることは間違いない。

（にしの・りゅうじ　八戸工業大学第二高等学校教諭）